追手門学院大学地域創造学部紀要
2016年3月10日，第1号，133-178

ある山村におけるムラ社会の実態（前半）

安 村 克 己

A Portrait of a Japanese Mountain Village
── A Case Study on Marginal Settlement Z Mura ──

Katsumi Yasumura

要　約

本稿（前半）は、典型的な山村であるzムラについて、現時点にムラ社会が成り立つ実態を素描する。その実態は、山村集落社会を構成する4つの力動性、すなわち1) 孤立化、2) 自然の基盤化、3) 周辺化、そして4)自律化という力動性を準拠枠として、zムラにおける主に聞き取り調査の結果などを通して描き出される。調査結果から浮かび上がるzムラ社会の実態は、1) ムラが山地という自然の中に「孤立化」したので、2) 高度近代化から取り残されて「周辺化」し限界集落となったが、その「孤立化」と「周辺化」のゆえに、3) zムラ社会の生活は「自然の基盤化」において成立し、また、4) 住民が主体的にムラ社会を運営して、伝統的に「自律化」している、という状況である。

キーワード：山村、限界集落、孤立化、自然の基盤化、周辺化、自律化

はじめに

本稿は、生活空間再生論（安村2009, 2012）が持続可能な社会の成立要件とみなす「自然・生態系」と「対面的社会関係」の基盤という2つの要件を充たす山村ムラ社会の事例について、その生活空間の実態を描き出す。この事例研究は、ある1つの集落社会において集中的になされた。その対象地は、典型的な山村の特徴を有する限界集落である。限界集落という、持続可能な社会の理想とは逆転したムラ社会の現実があえて取り上げられるのは、その限界集落が再生を模索しながら実践しつつあり、しかもその実践が高度近代化に抗うかのように、そして持続可能な地域社会を構築しているかのようにみえるからである。

そして、その事例には、紀伊半島の山地に位置するz町が選ばれた。当初、筆者は、観光まちづくりの成功事例を調査する目的でz町を訪れ、まちづくり関係者の活動を記録したが、その調査過程で当地住民の日常生活に接する機会が頻繁となるにつれ、生活空間再生論の見地から、調査の射程を拡大して当該集落社会の全貌を把握しようと試みた。当地の観光まちづくりは、住民の一部有志による実践にとどまらず、z町自治活動と連結し、住民全体の日常的実践と密接かつ複雑に絡み合いながら遂行されている。観光まちづくりも住民自治活動も、住民の日常生活を基盤として実践されているのだ。当地の日常生活の社会的基盤が限界集落再生の原動力となりうる、という発見は、観光まちづくりの現地調査の結果が生活空間再生論の着想と結びついた、ひとつの契機であった。

そこで本稿は、a市z町という典型的な山村の事例について、現代ムラ社会が成り立つ状況を特徴づける4つの力動性（安村2012）によって整理し、さらに、それらの力動性が、持続可能な生活空間の形成といかに連動するかを明らかにしたい。z町は行政上の「町」であるが、その社会構造の実態は「山村」というムラ社会として特徴づけられるので、z町を文脈に応じて、片仮名で表記し「ムラ」とよぶ(1)。ムラは、「村」という行政単位の区画とは区別される。ちなみに、z町の住民は、しばしば自らの町を「ムラ」と呼んでおり、その意味はおそらく本稿で表わすムラ社会の概念に等しい。また、都市部で「まちづくり」に取り組むコミュニティの単位については、行政区画の「町」と区別して、片仮名でマチと標記する。

なお、人名と地名については、調査対象者のプライヴァシーなどに配慮するため、略語を用いる。zムラ住民の人名は英語アルファベットの大文字で、zムラにかかわりが深いがzムラに居住しない部外者の人名にはギリシャ語アルファベットの大文字で表わした。それらの大文字の後に、男性にはm、女性にはfを付し、さらにその後の（　）内には、当該ムラにおける高齢化の実情をいくらかでも浮かび上がらせるために、当該者の年齢（2012年12月時点）を入れた。たとえば、Am(89)は、A氏男性89歳、またCf(74)はC氏女性74歳を表わしている。また、地名にはアルファベットの小文字を用いて表わすことにした。地名の同一文字にアポストロフィが付されている文字は、例えば、“k”=「京都」を“k'”=「きょうと」とするように、「ひらがな」ないしは「カタカナ」表記を表わしている。ただし、本文中のアルファベット文字はすべて、指示対象の音を全く踏まえず、恣意的に表わされている。

以上の調査研究の結果を踏まえて、山村の限界村落という深刻な危機が喧伝されるムラ社会の実態が、逆に、持続可能な革新的社会構想の手がかりとなる可能性を議論する。こうして、この現地調査では、zムラという山村の全体像が、住民による物語の集積として、筆者の視点を通して描き出される。

1. 調査対象地zムラの概要

事例研究の対象地　本調査研究が現地研究の対象地としたz町は、「山地に存在し、山地のもつさまざまな要素がそこにおける生活の成立に大きく機能しているような集落社会」（宮口1988: 159）という条件において典型的な山村である（安村2012）。zムラは、山中にあって市街地から物理的・心理的に孤立し、当地の住民の社会生活は山地の影響を全面的に受ける。その世帯数は49世帯、住民の人口は83人（男40人・女43人）である（2012年12月現在）。その人口のうち年齢70歳以上が全体の7割を超えている。したがって、定量的な条件だけでみれば、zムラはいわゆる限界集落である。

しかし、zムラでは、詳細については後述するが、高齢化した住民が、別居子やボランティアの支援などを受けながらも、相互扶助活動によっていまなお祭祀、清掃、娯楽行事などのムラ社会機能を維持している。さらに、zムラの住民有志は、主体的に地域再生に取り組んで成果をあげてきた。その実績は、公的機関から地域振興の受賞などを通して、社会的に広く評価されている。そして、zムラの限界集落再生は、いまやz町自治会によって住民の大半が取り組む活動でもある。

多くのzムラ住民は、個人的・社会的に様々な問題を抱えていても、年金を受給しながら自給農業をつづけ、山地における四季の自然のなかで「相互扶助」の日常生活を送る。こうして、zムラは、「自然・生態系」と「対面的社会関係」の基盤のうえに成り立つ典型的な山村とみなされる。この理由から、zムラが本調査研究の対象として選択された。

事例研究の方法　本現地調査では、zムラにおいて、一事例だけをできるだけ綿密に探索する集中的現地調査がなされた(2)。山村限界集落については、すでにいくつかの事例研究がなされているので、それらの研究成果を参照しながら、本調査では、1つの山村についての集中的な観察と考証から、山村が成立し存続する力学を摘出しようとした。ここで報告される結果の調査期間は2010年8月から2013年12月までの約3年間であるが、調査は現在も継続されている。その間に、1週間の滞在を2回、また2泊か3泊の短期間の滞在を30回行ない、当地を断続的に訪れるかたちで調査が実施された。

筆者は、できるだけ住民との親近性 rapport を築きながら、現在のz町住民の個人史に関する聞き取り調査（ライフ・ヒストリー／オーラル・ヒストリー）を行なった。この聞き取り調査は、住民に時間と場所を設定した所定のかたちでなされている。その他にも住民による口述の記録は、突然に住居を訪れたり、催事や行事の場に赴いたり、道端で偶然に出会ったり、住民同士の井戸端会議に割り込んだりと、時間の許す限り、場所を選ばず非公式にもなされた。またzムラの祭祀や年間諸行事に、筆者は学生調査補助者とともに参加し、適宜、聞き取り調査も実施している。そのさいになされ

た住民と学生とのなごやかな交流は、コンタクト･ゾーン　(Pratt 1992: 7) としての調査現場における筆者と被調査者の間に親近性を醸成するのに寄与したと感じられる。

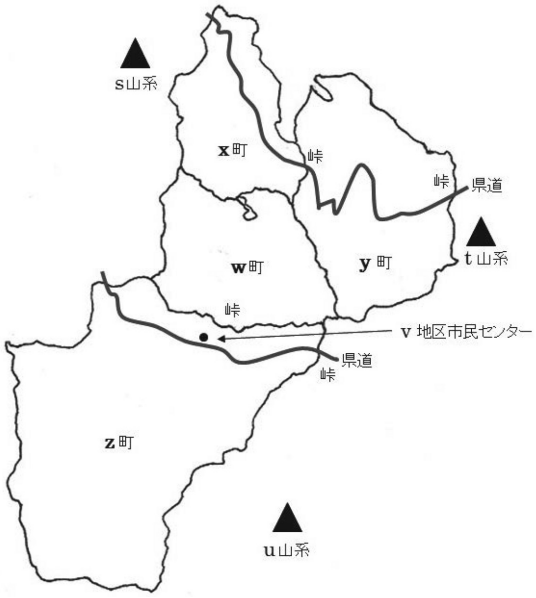
また、zムラの実態を描き出す主たる研究資料の1つとして、z町を含むv地区の住民が作成した『郷土史v'』(以下、『郷土史』) が用いられた[3]。これは、v地区連合自治会が1994年春に作成を開始し1997年に完成した、専門家が関与しない、住民による手作りの郷土史である。なお、本稿中のページ数のみが記された引用は、すべて『郷土史』によるものである。

また、現在のz町住民が生まれ育ち、ムラを築いてきた期間――おおよそ、1930年代初め頃 (昭和初期) から現在までの期間――を辿り、その間の山村における状況と変遷も明らかにしたい。それらの住民は、昭和ヒトケタ生まれで、「戦後の日本農業の変遷を中核となって支えた世代」(築山秀夫) である (鳥越2007: 61)。この世代の住民のライフコース life course は、zムラの戦後史と重なっている。本研究は、聞き取り調査でえられた住民のライフヒストリーから生活空間の実態を記録し、そこにzムラの戦後史を浮かび上がらせ、さらにムラ社会の成立原理を探ろうと試みた。

zムラの沿革　zという地名は、『地名大辞典』(角川書店) によると、室町期の記録からみられるようだが、当地についての諸史料は入手できていない。おそらく、zムラは、中世頃から惣村のような形態で成立した。『郷土史』などによると、1889 (明治22) 年にzムラを含む6集落がv村として編成され、zムラは村役場がある中核的な大字となった。しかし、各大字は山中に点在し交通が不便であったため、相互の交流が少なく、それぞれに対立しがちであり、v村としての行政は十分に統制されていなかった。その後、v村は昭和の大合併時 (1953年～61年) に、z大字を含む東部4大字と西部2大字とが合併の行方をめぐって紛糾のすえに分村し、最終的には、1955 (昭和30) 年に東部はa市と、西部はb町とそれぞれ合併した。東部4大字には、1968 (昭和43) 年に市制改正で町制が施行され、z大字はz町となった。かつてのv村東部4大字は、現在、行政上の区画ではないが、a市内で自他ともにv地区と称される。z町にはv地区の市民センターと公民館が置かれている。

v地区は<すべて山の中である>。その地形は、3つの山系の「連峰に囲まれ、起伏する山なみがうねうねと長くつづく山地」(p. 1) であって、v地区4町は、いずれも、「山地に存在し、山地のもつさまざまな要素がそこにおける生活の成立に大きく機能しているような集落社会」(宮口1988: 159) という、典型的な「山村」として特徴づけられる。v地区の総面積は約1,259㌶、その8割余りが山林で、耕地は33㌶に過ぎない。z町の総面積は503㌶であり、やはりその8割余りは山林である (p. 3)。

このようなv地区の山中に点在する4町では、各自治組織の活動が活発だが、同時に、4町間における共同の事業や行事も頻繁に実施されている。各町の自治会は、1968年にv地区連合自治会を設立し、さらに、2011年6月には住民自治とa市の連携を強化するv住民協議会が発足した。(住民協議会は、住民の主体的な地域再生活動の広域化をめざして行政との連携強化をめざす目的を掲げるが、協議会によって行政の制約を受ける、と一部の住民から批判されている。)



図：v地区と4町

2. 山村の力動性からみるzムラの実態

山村のzムラ社会における実態について、山村を成立させる力動性の視点（安村2012）から描出してみたい。山村のムラ社会は、山地に存在する地理的・物理的状況から、平地部の地域社会とは異なる固有の特徴を有する。典型的な山村であるzムラも、山村特有のムラ社会の力動性によって特徴づけられる。そこで、山村を成立させる4つの力動性――孤立化、自然の基盤化、周辺化、そして自律化――によって、山村zのムラ社会の現実を描き出そう。

2-1　孤立化

孤立化とは、ある社会が地理的・物理的条件ないしは／および社会的・心理的条件によって、他の地域との交流や交通が阻害されたり遮断されたりする結果から生じる社会状況をいう。山村は、そもそも山地に位置するという、地理的・物理的条件によって平地社会との交流・交通が希有となりがちで孤立化する。

zムラをはじめv地区全体は、山地に位置して交通に多くの障害があったため、歴史的に平地の都市部や農村部から地理的－物理的に孤立してきた。v村が1889（明治22）年に編成されて以来、村の「最大の悩みは、交通の不便であった」（p.29）。現在では、交通の整備がなされ、自家用車の普及によって交通の便が改善された結果、地理的－物理的障壁は軽減されて実際に平地部との往来も頻繁になったが、依然として住民の心理的な孤立感は深い。現在のv地区では北と南の2つの峠で、それぞれに県道が連絡している。現在、地区外との交通では、4町のどこからもa市の中心市街地まで、約20数㌔の距離を自動車で30分以内に到着する。しかし、v地区の各ムラは、山によって市

街地と隔てられ、昔も今も地理的・心理的に孤立してきた。

v村4大字内の往来でさえ、第二次大戦前には難儀であった。地区内の交通は、主として東と西の2つの峠で結ばれている。地区内の主な道の距離はそれぞれ2㌔から6㌔程度と短いが、未整備な狭道や急な坂道であったため、徒歩での移動には険難であった。そのような道で、1950年代中頃以前の4町間の往来では、徒歩や自転車による移動がなされた(4)。いまは地区内外の交通が自動車によって比較的容易になった。現在、地区内の交通には、4町住民のほとんどが自家用車、特に軽トラックを利用している。1960年代に自動車が普及する以前には、元v村における4つのムラの交流はほとんどなく、それぞれに孤立していた。

zムラが1950年代初め頃に孤立した状況については、当時、周辺地域からzムラに嫁いだ女性住民たちも口々に語る(5)。たとえば、近隣の村に生まれ、zムラに暮らして50数年（2002年12月時点）になるCf(74)は、近隣の村から「嫁いで来るまで、峠を越えたところに家があるとは思わなかった」。また、z町から県道の峠を越えた隣村から嫁いできたDf(70)も当時を思いだし愉快そうにいう、「ここらに来たのは、［中学の遠足で］山に登りにきたときくらいですわ。そのときにな、ガタガタ道の、本当にバスが通るくらいの、通ったら対向できやんくらいの細い道ですねん。そんでなあ、バスに乗りながら、こんなとこに誰が住んでんやろう、こんな凄い山の中になあ、言うとったら自分が来ましてん。わはは（笑）。」

このように孤立したzムラにおいても、高度経済成長期の前半に林業が活況でムラの景気が潤ったさいには、林業関係者や行商人が多く訪れた。それらの訪問者は、zムラに2軒あった旅館に宿泊した。Am(89)によれば、1960年代から70年代でも、「［中心市街地］aからは、泊まりでなければ来られなかった」。a市中心部から峠を越えてzムラに至る県道は、前述のように、1932（昭和7）年に開通したが、ようやく自動車が1台通れる片道一車線の狭い道路であり、峠にはカーブが多く、勾配も急であった。こうして県道の開通にもかかわらず、高度経済成長期にもzムラやv地区と平地との交通は相変わらず不便であった。道路幅員が二車線に拡張され、急カーブが緩和されたのは、1988（昭和63）年のことである。

このように、zムラの孤立した状況は、第二次大戦以前にはその存在が隣接地域からさえ認知されないほどであった。その主たる理由は、住民によれば、zムラが元v村の集落と同様に山地の自然に閉ざされ、他地域との交通がなかったからだ。

2-2　自然の基盤化

人間とその社会は、もともと自然から切り離せない一部分であるが、近代化とともに自然から自律し自然を制御できるかのように振る舞ってきた。そして、近代化に伴う都市化につれて、人間の生活と自然との結びつきは途切れたかにさえみえる。しかし、いまだに自然という基盤のうえに社会が成り立ち、自然と不可分に人間が生活する現実もある。このような現実において社会が成り立つ状況を、自然の基盤化とよぶ。

zムラでは、他のv地区各町と同様に、山中に形成された集落社会において、住民の生活全般が、必然的に山地の自然のうえに成り立つ。その住民の生活は、山地の自然から切り離しえない。すべての住民が、山地から多くの恩恵を受けながら、同時に多くの災難も被りうる。山村の生活は、年間を通して日常的に山地の自然に関心を抱きつつ営まれる。

近年、一般的に山地がもたらす効用は、都市化における負の側面と対比されながら、再考されている。そのさい注目されるのは、生物多様性や地球環境の保全（地球温暖化の緩和・地球気候システムの安定化保全）、土砂災害防止や土壌保全、水源涵養、快適環境形成、保健・レクリエーション・文化的活動の場、木材などの物質生産といった公益的機能である（林野庁）。そうした山地の自然を基盤とするzムラ住民の生活がいかなるものであるかを、以下でみてゆく。

生業　そもそもzムラ住民が従事する生業が、ほとんど山地の自然と切り離せない。zムラの生業は、伝統的に自然を基盤とする林業と農業である。「昔からこの［v地区］地域の住民は農業と林業により自給自足の生活をしてきた。たとえば大正期まで採草地として大規模な入会林や共有林が残っていたし、明治時代の植林の中に水田や茶園の跡が散見されるからである。また、住民の中に多くの木挽職人がいて、建築材を加工する「リン場」も残っている」（p. 102）。

ただし、zムラ住民が戦後に生業とした林業は、当地の山の自然を一変させた。戦前のzムラの山は雑木林であり、丘陵地や狭い平地はほとんど水田であったが、戦後の木材景気によって、国の政策で拡大造林が推進され、zムラにおいても田畑や雑木林を潰してスギやヒノキが植えられた。Em(74)によれば、「高度経済成長期に材木が足りないということで、山の木を切って、スギやヒノキを植林したと、これが国の方針として打ち出されて、こういうふうに真っ黒な山になっちゃった」。Em(74)は、これが現在の獣害の遠因だと考えている[(6)]。

健康　z住民との会話を重ねると、山にかかわる生業においてばかりでなく、言葉の端々に山地における自然の基盤化が表出され、山の自然は住民の心身に染みついていると、筆者は個人的に感じる。そして、筆者がzムラを訪れるたびに体感するのは、山の緑の中に身を置いてえられる安堵感である。この感覚はおそらく、河合（1990: 12）が進化論から指摘する、人間にとっての「内なる自然」にちがいない。「内なる自然」とは、樹上生活者として「濃密な緑の中で生を送ってきた」サルから人間が進化したという事実に基づく人間の存在における根源的な性質であり、「われわれが緑を求め、緑がない所では心が落ち着かずいらいらし、緑の中でこそはじめて安心感に浸れるのは、遠い先祖から受け継いできた系統発生的な適応感覚によるものなのである」。

実際、筆者と調査補助者がzムラを訪れるたびに印象深いのは、山地の自然のなかでz住民が心身ともに健康に暮らすその様子であった。zムラ住民の全人口83人のうち、年齢が70歳以上は59人（71.9%）であり（2012年3月時点）、平地部の病院に通院する住民もいるが、それでも元気に生活し、また80歳代の住民（23名）もみな楽しみながら農作業に従事している[(7)]。寝たきりの高齢者がいる世帯はない[(8)]。

住民に健康の秘訣を尋ねると、多くの人が「よく歩いたからかな」と答える。Am(89)はいう、「全部歩いた。よく歩いたなあ。皆が外に出てほどほどに働いたので、健康によかったのかもしれませんな」。現在のzムラ出身住民の大半は、昭和ヒトケタ後半世代であり、山を越えて片道4kmの中学校に通った。「地下足袋はいて、近道で山を越えて、たったか通った」とGm(81)は振り返る(9)。Hf(77)も「中学まで一時間歩いた」と60数年前を思い起こす。これは、第二次大戦直後の話である。Gm(81)は、「都会の80歳より山の80歳の方が強いな」といって笑った。

このように、zムラは山地にあって、産業化や都市化による空気や水の人為的汚染が少ないため、それも住民の健康に効果があるのかもしれない。zムラに上下水道はなく、住民は山頂に水源がある井戸から飲料水をとる。東京からzムラに住み着いて十年になるFf(42)は、「ここの水を飲むようなって、都会の水道水がカルキ臭くて飲めなくなった」と強調する。また、If(73)は、「米がおいしいのは、水がええから」という。空気も清浄である。f市都市部からzムラに移住して2年になる、Jm(49)はいう、「気管支が弱いんで、ここに来て、空気がよく、水もよく、体調がいい」。ただし、zムラの標高の低い集落では、春先は渇水しがちである。Jm(49)によれば「スギが水を吸ってしまう」らしい。自然の恩恵はなかなか人間の都合どおりにならないが、zムラ住民は自然の恩恵に感謝の気持ちをもって暮らしている、と感じられる。

食　z住民の食生活も、山の自然の恩恵を受けて、おそらく住民の健康保持に寄与している。現在、z住民は年金生活を送るが、ほとんどの世帯が小規模であれ自給農業を営む。収穫された作物はほとんど自給され、しばしば親交の深い世帯内で交換され、また子どもや親類にも分配される。zムラでは、米や野菜の地域自給率が高い。しかも、高地で比較的寒冷なために害虫が少なく、山地の土壌が肥沃なために、田畑には農薬や除草剤などがほとんど使用されていない。また、zムラの山中に自生する山菜も多様で豊富であり、季節には食卓にのぼる(10)。山菜は、まちづくりの一環として、朝市や食堂にも活用されてきた。

食生活でタンパク源となる食物については、どの住民も近隣にあるスーパーマーケットに自動車で出かけて買い求める。しかし、高度経済成長期以前には、「鶏を飼っていて、卵を産まなくなると食べた」（Hf(77)談）と多くの住民がいう。魚については、z住民はイワシやアジをよく食したという（If(73)談）。戦前には、魚の行商が港町から来ていた。また現在（2012年12月時点）でも、Lf(82)は、亡夫の魚屋を引継ぎ、b港の魚市場で魚を仕入れて、魚屋を営んでいる――この魚屋はいまや、2007年にz町自治会が創設しした「v'コミュニティー　みんなの店」以外ではz村で唯一の店舗となった。Lf(82)はいう、「スーパーができるまでは、すごく儲かった。みんな月々で払ったり、盆正月で払ったりした」。

さらに地元のz川では、川魚も捕れたようだが、高度経済成長期に河川の氾濫を防止する護岸工事がなされてから、魚は捕れなくなった。Hf(77)はいう、「昔の魚もおらんなったな。私の子どもん頃は、たくさんおった。ギシャンド、クソンド、ウナギもおった。父が、モンドリをかけて、大きなウナギをと

ってきた」。たまたまHf(77)の隣にいたMm(79)がつけ足していう、「ウナギは全然おらん。穴がない」。

このように、zムラの食生活は全般に、伝統的にも現在も相対的に自給率が高い。その日常の食卓には地産地消が実現され、「四方四里に病なし」という格言が、例えば新鮮な食物繊維を多く摂取する結果となって、住民の健康に効力を発揮しているようだ。実際に大都市では、高価にもかかわらず、やれ自然食だ、やれスローフードだと、食があらためて見直されるのをみると、zムラの食生活は健康的であり豊かでもある。

災害　しかし、山地は住民の生活に深刻な災難ももたらす。とりわけ台風は、zムラに土砂崩れや鉄砲水などの深刻な災害を何度ももたらした。そのために、zムラでは伝統的に消防団が災害時の防備や避難誘導を担当し、戦後には水防団が組織された。『郷土史』では、台風による、高度経済成長期（1960年代）以前の当地の災害が次のように記されている。

> ……ひとたび台風の直撃を受けると山林は各所で崩落、大木を巻き込んだ土石流が川幅一杯にうねり、轟音とともに濁流が道路、田畑、宅地まで飲み込んでしまう。川沿いの道路はえぐり取られ、木橋は一瞬に押し流され、人は恐怖におののくのみである。台風の過ぎ去った跡は見るに堪えない惨状を呈する。田畑は崩壊し、水路は消滅し、稲は倒伏、大木が流れ込み、土砂が丘を築いている。家は瓦が跳び、杉皮屋根が剥げ、土砂が入り、塀は飛んでいる。電線が切れて何日も停電が続く。そんななかで後片付けや修理、田の稲起こしに追われる。職人を雇って瓦や塀を修繕し、道路は出合で修復した。昭和20［1945］年代まで災害の復旧はすべて自力であったから、苦労は並大抵ではない。かつてのv［地区］は年に一度や二度、こんな被害を受けていた。（p. 176）

高度経済成長期の1960年代から、山村振興政策の一環の公共事業として、砂防堰堤の建設、護岸工事、道路整備などが着手され、zムラにおける洪水の災害は次第に減少した。また、「田畑の復旧工事、居宅背後の急傾斜地対策工事についても政府補助が交付されるようになって住民の負担が軽減された」（p. 178）。

しかし、砂防堰堤の整備後にも、1959（昭和34）年の台風15号（伊勢湾台風）、1973（昭和48）年の台風20号、1982年（昭和57）年の台風10号といった大型台風の襲来が、zムラに甚大な災禍をもたらした。とりわけ1959（昭和34）年の伊勢湾台風の被害によって、z町の転出者が続出し、その過疎化に拍車が駆けられた。

現在のzムラ住民も、自然災害を被った経験をもつ。q垣内のGm(81)は、1953（昭和28）年・台風13号で、県道の峠を下って隣接する町の営林署に勤務し、山林の伐採をしていた実兄（当時19歳）を亡くした。実兄は、信州から訪れた知人2人（父子）と営林署官舎付近の川縁にいたさい、鉄砲水で流された山の木々に巻き込まれた。Gm(81)にとって突然に訪れた、いまだ心の傷が癒えない不幸であった。

また、1982年の台風10号は、「伊勢湾台風をはるかに上回る災害」（p. 184）をz町とv地区全体に

もたらした。当時、消防団員であったNm(80)は、音信不通な隣家の無事を命がけで見て回った。当時のv出張所所長の手記には、Nm(80)からの連絡（8月1日午後11時30分）として、「必死で橋を渡り隣家へ行ったところ、本人は無事だが土石流で身動きできない」と記録されている（p. 182）。そのときの心境をNm(80)に尋ねると、「あぁ、消防団だったでな」とだけ穏やかに応えたが、妻Nf(72)は、「家の前の橋にも水が溢れ、こんな嵐の中を、…」と身震いして当時を振り返った。N家の垣内で孤立した家々は無事であったが、同垣内で安全と思われた地区の一家が、翌日に山崩れの土砂で生き埋めとなって発見された。

Hf(77)は、「ここらの水は、［台風で]出ても［春の渇水で]出なくても困る」と苦笑いをした。zムラにおける山の自然は、住民の思い通りにはならない。

山の神　かくして、山という自然は、住民にとって恩恵と脅威のいずれの源泉でもある。そうした山にたいする住民の情緒的傾性は、zムラをはじめv地区全体の垣内や組ごとにに祀られる「山の神」に表象されている[11]。山の神の由来についてはzムラの住民自身にも分からないが、毎年冬季の定日に「山の神祭」がそれぞれの垣内や組で伝統に挙行されてきた。山の神祭には、山にたいする住民の畏怖や感謝などの複雑な情緒が投影されている。v地区各町が、限界集落化した現在では、多くの垣内や組で「山の神祭」の挙行が途絶えたが[12]、住民の山にたいする心情は今でも確かに強いと印象づけられる。

2-3　周辺化

資本主義経済が地理的・空間的に拡大する不均等発展から生じる、社会の中心－周辺構造において[13]、ある地域社会が高度近代化社会の周辺に位置づけられる現実を、ここでは周辺化と呼ぶことにする。周辺化は、資本主義経済の開発機能が集積した拠点である「中心」から、経済活動域としての市場が拡張した辺縁部の最前線となってゆく事態である。「周辺」は、「中心」の開発機能の基礎財を提供し、その機能を補助・補完するがゆえに、「中心」から経済的・社会的に支配・収奪される。そして、資本主義経済が原動力となって産み出す近代文明は、資本主義経済の構造の中心から周辺へ向けて漸次的に浸透するが、ブローデル（1966:48）が指摘するように「文明は山には登らない」。そのため、山村は近代文明から取り残される。

周辺化した山村における経済活動の特性は、地域住民の生業において顕著に現われる。山村の生業には、一般的に、個人が複数の異なる職業を掛け持つ兼業型が多い（安村2012）。その主たる理由として、単一職業で生計を成り立たせる生業が山村に存在しない、という周辺化の本質を反映する状況がある。周辺地域の生業は、中心を支える食糧や原材料の供給などに関連し、しばしば中心の社会的経済的状況によって、それらの複数型生業のうちのいずれかや、場合によっては全ての生業の存続が翻弄される。また、一般に周辺は、中心の景気が活況となる時期には、中心の労働市場に労働力を供給する。

周辺化した山村zムラの生業も伝統的に複数型であり、zムラの多くの世帯は、生計を立てるため

に第二次大戦前までは稲作を主とする農業と、薪炭や養蚕などの兼業、さらに山務労働にも従事した。その後、高度経済成長期になると、「中心」経済に木材需要が急増し、木炭需要が消滅したため、zムラの生業は山務労働を兼ねた零細農業となった。大戦後の木材需要に応じて、政府の奨励もあり、「山持ち」の住民は誰もが「雑木林を切り払い、水田や畑を潰して、スギやヒノキを植えた」（Am(89)談）。当時には、所有する山を高値で売り、離村する世帯も少なくなかった。大戦直後に住民が所有するzムラの森林面積は7割であったが、現在（2012年12月）、z住民が所有する森林面積は1割足らずで、zムラではほぼすべての森林が、企業や不在地主の所有となっている。

高度経済成長期におけるv地区の林業景気の隆盛で、高度近代化の影響は、大戦前には山中に孤立しがちだったv地区にも及び、この地域の周辺化を加速した。この事態によって、z住民の生業が転変した。近代化以来、zムラの生業は、資本主義市場経済が国内外で変転するそのたびに翻弄されてきた。ただし、その生業が自然を基盤とする農業と林業であり続けた状況は変わらず、戦前から戦後を通してzムラの生業は、「自給的稲作農業＋林業・製炭＋林業賃労働」という典型的な山村の生業形態どおりに変遷してきた。したがって、z住民の生業の転変とは、農業と林業における内容や職業間の比重の変化である。そして、1980年代後半以降、zムラの限界集落化とともに、その生業は消滅した。こうしたzムラにおける生業の転変を農業と林業についてそれぞれ概観してみたい。

自給農業　z住民の主たる生業は歴史的に、自家消費と僅かな余剰を市場に出す「自給的」農業であり[14]、主たる作物は稲作であった。zムラは典型的な山村ではあるが、その標高は350㍍から450㍍と比較的低く、気候も比較的温暖であるので、そこでは深奥の山村よりも比較的早く「山村の農村化」（柳田1931）がなされたようだ。Am(89)によれば、「このあたりは、全部水田だった。畑に変えたのは、30年前か、40年前［1970年～1980年頃］。所有者がいなくなって、田んぼをやめた。ここには、江戸時代から水田があった」。v地区全体の稲作については、次のように記録されている。

> 昔の人々は、田になりそうな場所であれば、丘の上、山の裾など、どんなに狭い場所でも、高い石垣を積んだり、土手を造ったり、斜面をならしたり、いろいろ工夫して田を作った。現代の私たちにはとてもできないような努力が日夜積み重ねられてきた。この結果、山間部の水田は段々になっていて、小さく区切られているのが特色である。（p. 109）

v地区では全体的に耕地面積の小さい零細農家が多く、zムラもその例外ではない。v地区全体が戦前から耕地面積の小さい在村地主ばかりだったので、当地の農地改革の影響は軽微であった（p.103）。Nm(80)によれば、zムラでは戦時下の1943（昭和18）年に実施された不在地主の農地没収政策を契機として、不在地主が自身の土地を国に接収されないように地元に戻り、稲作を始めた。しかし、zムラでは各世帯の耕地面積が狭いために、平和時となっても専業農家で生計を立てるのは難しかった。敗戦後の1950年代の農家と農業の実情についてAm(89)はいう、zムラに「170軒あったけど、農業で暮らしを立てていたのは、10軒ありませんでな。1町歩田んぼをもっていた人がいなかった。山5町歩以上もっている山地主が10人くらい。170軒あって、約1割。ほとんどは山の仕事で

生活。山もない持ち家もないですわ」。

このように零細農業の多かったv地区では、自給稲作の副業に木炭生産や養蚕が営まれていた[15]。木炭生産は、v地区全体で盛んであった。v地区の木炭生産は、高度経済成長期に灯油やガスが燃料として使用されはじめ、その需要が急減すると廃業となった。現在（2012年12月）、z町で炭焼き窯の跡は、1カ所だけ確認される。それは観光客の誘致目的で復元されたものだったが、いまでは観光用にも使用されず、放置されている。また養蚕は、1929年の世界恐慌で絹の輸出が減少して衰退した（p. 102）。さらに戦時中には、食糧供給のため桑がすべて伐根され、その後、zムラの養蚕も消滅した（Pm(80)談）。

戦時中には米の増産が進められたが、収穫された米は全て国に供出され、zムラで収穫された米は、v地区の他の3大字と同様に、住民には全く食されなかった。戦時中の全国的な食糧難は、食料生産地のzムラでも同様であり、当時にはサツマイモ、ジャガイモ、カボチャ（カボチャ団子）、クキなどが主食であった。戦時中のz小学校では、Pm(80)によれば、校庭の全面をサツマイモの畑にしていた。Nf(72)は、あの頃は「とにかく白いご飯をお腹いっぱい食べることが夢だった」と述懐する。Nf(72)の夢は、戦後のzムラで稲作が再開され、夫のNm(80)が米づくりに専心して適えられた[16]。

昭和7（1932）年生まれのNm(80)は、戦後日本農業の中核となってそれを支えてきた「昭和ヒトケタ生まれ（1926～1935年の出生）の世代」であり（鳥越［築山秀夫］2007: 61）、zムラで父親から受け継いだ山を持ち、生業の農業と林業に成功した1人である。Nm(80)は、食管法によって減反政策が1970年に始まると、戦争直後から熱心に取り組んだ米づくりをあっさりとやめ、自給の水田を残して、小豆や杜仲茶をつくりはじめた。街路樹の生産も手がけ、東京の大手花卉小売業者と契約し、大阪万博にも街路樹を出荷した。Nm(80)の耕地では多品種の農作物が栽培されたが、杜仲茶の生産が成功し今もつづけられている。N家の生業である農業生産の内容や形態は、「中心」の経済動向や政府の政策が変化し、またNm(80)自身がその変化に対応して、短期間に転換した。この事例に限らず、zムラ住民が生産する農産物の種類は、中心の農産物需要や政府の農業政策などに従って、変容しつづけてきた。

林業　戦後から高度経済成長以前まで建築用木材需要で林業が活性化し、zムラの生業に林業が農業と並んで大きな位置を占めた。山持ちでない多くのzムラ住民は、自給農業とともに山林労務の賃金労働に従事した。木挽も多くいた（p. 102）。「この［戦後から1950年代前半まで］時期「山師」、または「親方」といわれる素材業者が乱立し、一時はこれらの素材業者が［v村］村会議員の大半を占めたこともあった」（p. 104）。zムラにおける材木ブームの盛況ぶりを伝える話として、「毎晩、芸者を街から家に呼び、宴会を開く山持ちがいた」という（Pm(80)談）。またz町には、林業関係者や行商人が宿泊するための旅館が2軒あった。v地区の「製材工場の数も最盛期には、z［町］7、x［町］1が稼働し、製材をトラックで市内の材木店に盛大に出荷していた」（pp. 127-28）。

大戦後にzムラで農業に成功したN家やM家のような数世帯の住民でさえ、林業も生業としていて、

そうしなければ生計を立てられなかった。数少ない「山持ち」は、拡大造林の国策を背景とする植林ブームに、国の補助を受け（国の補助はなかった、という人もいるが）耕地をつぶしてスギやヒノキを植えた。しかし、「山から木を持ってくるだけでいいカネになった」（Nm(80)談）。林業の景気は、農業と同様に、中心の経済的政治的状況に応じて変転した。

v地区全体を席巻した材木ブームと植林ブームは、1960年代半ば頃に最初の転機を迎えた。この頃から、「製材工場は製品輸送に便利な市街地に移ってv［地区］から姿を消した」（p. 128）。同時期に、z町の数少ない大規模な山林経営者も、当地を離れ都市部に移っている。「製造工場は村の青年が就労し得る唯一の近代産業」であったが、その工場が全て閉鎖になり、村の若者は、仕事を求めてz町から流出した（p. 128）。木挽も姿を消した。v地区の過疎化は進行し、とりわけzムラの過疎化は急激であった[17]。

材木ブームや植林ブームも、木材輸入が1957（昭和32）年から段階的に自由化され、64（昭和39）年には完全自由化となって外材が大量に流入したため、その影響で次第に衰退した。当時の様子を振り返りCf(74)はいう、「昭和36、7年［1961、2年］に［z町に］お嫁に来た。ここに来たときは、にぎやかだった。山がよろしかった。そやもんで、みんな山の仕事やった。それから段々とマチへ出て行くようになった」。若者や大規模山林経営者が都市部に移住した後に、z町在住の山林労務者も、60年代後半には次第に流出し、70年代前半にzムラの活気はなくなった。Mm(79)がいう、「材木や山林労務もなくなり、村は昭和40（1965）年頃から衰退し始めた」。

ところが、1970年代初めに日本列島改造論を契機とした土地投機バブルが発生し、山林投機のバブルも発生した。「バブルの主因は土地ブローカーが山林素材の買い付けではなく山林そのものを盛んに売買したことにあり、その結果、v地区には大量の不在地主が発生した」（p. 104）。現在（2012年）、zムラの山林の8割は、不在地主の所有である。またzムラの宅地や耕地についても、不在地主の問題がいま深刻化している。

山林投機後の1980年代半ばに、z町をはじめv地区の山林経営は破綻し、いよいよ「山の仕事がなくなって、大勢がここを出ていった」（Lf(82)談）。この頃に「山林経営の採算が悪化し、間伐材も切りすてたまま放置されるようになった」（p. 104）。1950年代後半から1960年代前半までの植林ブームでzムラに育成された、特に個人所有の山林におけるスギやヒノキは、この間、一時的に投機の対象となっただけで、その後には、現在まで採算が取れずにほとんど放置されたままとなっている。つまり、1960年代の植林による投資は、いまだ回収されていない状況なのだ。そして1980年代後半以降にzムラの少子高齢化が急速に進み、限界集落となり、1988（昭和63）年にはz小学校が「107年の歴史に幕を下ろし」（p. 45）廃校となった。

このように、zムラ住民の生業には、「中心」による「周辺」の支配・収奪という周辺化の本質が投影され、それらの生業は中心が経済的・政治的に変化するたびに転換を余儀なくされてきた。周辺化した山村の生業は、従来、多量労働時間や低収益性などの性質をもつ職業形態に限定され、「中

心」の補完的・下請的労働であった。例えば、養蚕は、本来は相対的に寒冷な山村には不向きであったが、立地環境のよい地域がより収益性の高い産業を営んだため、周辺的な産業となり、山村の典型的な生業となった（宮口1988: 161）。そして、1929（昭和4）年の世界恐慌によって絹の市場が急減し、養蚕は衰退した。もちろん「中心」の基幹産業にも盛衰の転換はあるが、特定化して地域全体の生業となりがちな「周辺」産業の盛衰は、地域全体の好不況に決定的な影響をもたらす。zムラは、当時の林業という「周辺」産業の衰退によって存亡の危機に瀕した。

文明の後進性　このように「周辺」産業が住民全体の生業となる、資本主義経済の「周辺」地域では、近代化が遅れて都市化せず、そのために近代文明の効率的・利便的な物的環境が部分的にしか達成されない。高度近代社会においては、都市化した「中心」の社会状況が「発展」と評価され、逆に、「周辺」の社会状況は「未発展」や「停滞」と評価される。近頃は、高度近代化の弊害である自然・生態系の破壊や対面的社会関係の切断が一般的に問題視されはじめた状況から、自然の基盤化のもとに生活を営み、対面的社会関係を保つ「周辺」地域の社会状況がときに再評価される。しかし、それでも、「周辺」地域社会は、衰退し消滅すると一般的に認識されている。

典型的な山村であるzムラは、前述のように、主に山地の地理的・物理的条件によって孤立化し、個人の生活の物的状況に効率性・利便性・快適性をもたらす近代化を十分に享受できなかった。この状況は、zムラ住民がしばしば口にする「なんにもないとこやもん」という言葉に象徴される。もちろん、食住衣をはじめとする日常生活に関連する近代化は、第二次大戦後になるとzムラにも急速に普及したが、zムラにおける近代化の質や量は、都市部に比べて全般的に限定的である。こうして、高度成長期以降のzムラにおける社会構造と住民の生活は、高度近代化の「周辺」部の末端でつながりながら、文明の恩恵をなかなかえられず、かえって文明の変動に翻弄され、都市「中心」部から搾取さえ受けるような社会状況が生みだされた。そして、周辺化という構造は固定化される。

現在の住民にとって、zムラが本格的に近代化したと感じた出来事は、1932（昭和7）年に都市部とつながる県道の開通であり、**自動車の普及**であった。v地区住民が作成した『郷土誌』には、県道の開通で「これまで陸の孤島であった当地区へ初めて自動車乗入れが実現し、ようやく文明の恩恵に浴することができるようになった」（p. 155）と記されている［傍点は筆者］。しかし、その県道には、zムラに至る峠の勾配が急なためにカーブが多く、道幅も狭かったので、林業景気で交通量が増えると不便であった。そこで、v地区が峠のカーブの緩和と道路の拡張を求めて陳情を重ねた結果、道路の改修は昭和46（1971）年に着工されて昭和63（1988）年に竣工した。

県道の開通で、都市部とzムラの間を自動車が往来するようになったが、第二次大戦前にzムラで自動車を所有する住民はいなかった。現在、zムラの再生活動を担う昭和ヒトケタ生まれ世代が自動車の免許を取得し、オートバイや自家用車を購入し始めたのは、1950（昭和20）年代前半頃からである。山の神の準備で男性住民が集まったさいに、初めてオートバイや自動車を購入した話題になると、会話がはずむ。現在は、ほとんどの住民が、男性も女性も1人ずつ自家用車を所有し、その自

家用車でzムラ内やv地区内を移動する。もちろん、市街地へも出かけてゆく。それらの車種は、軽トラックが多い。

戦前から高度経済成長期まで木材の運搬などに使用されたのは、木炭車であった。木炭車のバスについて、その思い出をEm(74)公民館長は次のように語る。「僕が小学校の頃やから、昭和20年［1945］から24、5［1949, 50］年。炭をおこすやろ、いわゆる蒸気機関車やな。お湯を湧かすのやわ、その勢いで進むのやな。台数はけっこうあった。峠、向こうから距離が長いやろ、頂上の200、300メートル手前になると乗客がみな降りて、みんなで押す。そして上まで行くと、もう1度みんな乗って走る。バス停は、Um(78)さんのたばこ屋さんのところ。そこに一晩おいておく。朝起きると、ガーガーいっていた。運転手が一生懸命火をおこしていた。自家用車がなかったので、みんなそれで買い物に行った。ここはね、材木景気がよかったもんでね、余所で走っとらんようなものでも走っていた。」

また、小学生の頃から自動車が大好きだったGm(81)も、木炭車の思い出を語る。Gm(81)は、戦時中にzムラから木材を運ぶ木炭車の後を追いかけ、運転手に頼んで積んだ材木の上に乗せてもらった。中学卒業後には「材木屋さんに頼み込んで、木炭車の助手になって、炭を熾したり何かしていた」。さらに木炭車の運転手から自動車の運転を習い、18歳のとき（昭和24（1949）年）に自動車免許試験に合格した。Gm(81)はzムラで最初の自動車免許所得者である。免許取得後に、Gm(81)はa市内の運送会社の自動車運転手として就職し、木炭車で木炭の配送をした。「木炭車でいくとな、大阪いくのさ、トラックに燃料で炭をドカッと積んでさ、そいで木炭を運んでゆきよった。このあたりでは、炭焼きをやっとった」。高度経済成長期を迎える昭和30（1955）年代後半には、ガソリン車のトラックで材木や木炭を運搬するようになったが、やがてz町の林業が衰退し「山の仕事がなくなってきた」。

交通の便が開けた他に住民が近代文明の恩恵を感じた出来事は、**電気や通信**などの敷設や開設であった。電気の家庭照明がv地区に整備されたのは、1920年代後半頃（大正末期から昭和初期）にかけてである。「vの家庭照明は、明治まで種油を燃やす行灯であった。明治から大正にかけては石油を燃やすカンテラ、次いでランプに代わった。電気照明は大正14（1925）年、z［ムラ］、y［ムラ］に電灯が点り、昭和3（1928）年にx［ムラ］、w［ムラ］に点灯したのが始まりである」（p. 174）東京市内の電灯は1912（大正1）年にほぼ完全に普及しが、全国の電灯普及率が87％となったのは1927（昭和2）年であるから（電気事業連合会）、zムラをはじめv地区の電気の敷設は全国的な普及の最終期であった。そして、zムラのr集落（垣内）は他の集落から2㎞ほど離れて山中にあったため、そこでは電線の敷設が遅れ、1960（昭和35）年に初めて電灯が点った（r垣内は、今そこに人家は全くなく、1980年に消滅している）。

また、v地区の**郵便電報**は、明治・大正期に隣接郡の配達区域で取り扱われたため、郵便局へは徒歩で往復6時間を要し、郵便は遅配しがちであった。電報は用をなさないこともあったようだ（Wm(86)談）。しかし、1921（大正10）年に電報が、後に併合される隣接a市内局となったので、配

達の遅延が緩和された（p. 173）。そして、1927（昭和2）年にはzムラにv郵便取扱所が開設され、その後の1931（昭和）年にはzムラの名士が運営するv特定郵便局に昇格した。v特定郵便局は、1993（平成3）年にv地区の過疎化による不採算で廃局となったが、a市が過疎地域対策として運営するaz簡易郵便局が設置された。そして、この簡易郵便局も2007（平成19）年に郵政公社の民営化に伴い簡易郵便局は廃止となった。しかし、その後、引き続きz町自治会がaz簡易郵便局の運営を受託して今日に至っている。

電話については、他地域よりも比較的早くz住民が活用できるようになり、当時としては最新の技術でzムラに導入されたようだ。z簡易郵便局第三代郵便局長で、現在（2012年）にはv地区公民館長とz町自治会長も兼務するEm(74)によれば、「電話はね、共電式といってね、受話器を上げると郵便局がジーと鳴る。普通の磁石式は自分のところでダイヤル回して、そうじゃないと電話ができないという電話だった。ここらのは昭和6（1931）年に入ってきた。これは全国的にめずらしくて、ここらが合理化されたときに[18]、明治村と通信博物館に一台ずつ入れた」。

『郷土誌』によれば、共電式電話交換機は、1940（昭和15）年にz大字のv郵便局に設置され、そこから村役場、産業組合、個人家庭などに12台の電話機が架設された、とある。zムラ住民はそれらの電話機を借用した。高度経済成長期には、公衆電話が小学校に設置された。そして、1972（昭和47）年には公衆電話が廃止され、農村地域集団電話が設置されて、z町のほとんどの家庭が電話機を所有するようになった。農村地域集団電話が、自動電話に代わったのは、1978（昭和53）年である。また、隣接地域から延びる2本の電話幹線ケーブルは、1982（昭和57）年の台風災害を契機に、断線事故を防ぐために地中化された。

このように、電気や通信がzムラにおいて他の中山間地域よりも比較的早く普及した理由は、それらの技術の普及期がzムラにおける林業の盛況期と重なっていた、という経済的状況にあると考えられる。すなわち、高度経済成長期にz町の林業にたいする都市事業者の需要に合わせて、都市とzムラをつなぐ交通が整備され、電気や通信の供給も比較的速やかに対処された。

しかし、住民の生活に重要なインフラストラクチャである**医療施設**や**上下水道**は、zムラを含むv地区において、現在でも依然として整備されていない。大戦前までv村は無医村で、村人は軽症であれば、富山の薬売の常備薬や野草などで病気を治療した。重傷の場合には、医師のいる隣接の町村から医師を迎えて診療を受けた。このときに医師を迎える施設がzムラのp垣内にあり、「医者家」と呼ばれた（いまはIターン者Rm(71)の住居となっている）。重病で入院が必要なときには、病人を戸板や籠に乗せ、組の協同作業である「出合」によって山中を徒歩で運び、麓の隣接地域から馬車でa市街地まで運んだ。Nm(80)の話では、戦時中に父親が重病となり、出合で組の人が父親を籠に乗せて5㌔の山中を隣村まで運搬し、そこから馬車で移動してa市の病院に入院した。

その後、県道が開通した1932（昭和7）年から、それまでの「医者家」を診療所として、近隣にある村の医師がオートバイのサイドカーに乗って、週に1度、診察に訪れるようになった（p.198）。その

後、1959（昭和34）年に診療所がv地区のzムラとxムラに設置されたが、1980年代後半には無医療地区となり現在に至る。

z町には、上下水道は敷設されておらず、zムラの山中を水源とするz川が北上して用水とされている。v地区がa市に合併後、上下水道の施設が計画されたが、v地区各世帯の負担が大きいなどの理由で設置準備が難航し、結局は実施に至らなかった。それでも、zムラをはじめv地区の水質は前述の通り良好であり、その評判は近隣市街地にも広がっていて、多くの市民が市街地から山の湧き水を給水するためにv地区を訪れる。しかし、水道普及率は全国で96.7％であるから（厚生労働省健康局水道課）、v地区の水道未整備は都市化の遅れとみなされる。また、下水道処理人口普及率は、全国平均が77.0％であるものの、「中心」都市部で90％を超え、地方都市部では50％に満たないケースも多く、「周辺」地域部ではほとんど20％から30％という状況である（公益社会法人下水道協会）。現時点で下水道の未整備は、一般的に、周辺化の社会状況を表象している。

2-4　自律化

自律化とは、ある地域社会において、その運営が住民の自主的な自治組織活動によって国や地方自治体から相対的に独立して履行され、かつ当該住民の経済的・物質的需要が外部に比較的依存せずその自給度が高いような状況である。完全に自律化する地域社会は、もちろん高度近代社会においては存在しえないが、山村や島嶼のように孤立化し周辺化した地域社会では都市に比べて自律化の度合いが高い。例えば、多くの山村や島嶼では、依然として自治組織が住民の生活や地域社会の運営に主要な役割を果たし、個人の生活に不可欠な基本物資である食・住・衣についての需要が、地域社会内で比較的高い割合で供給され、また水やエネルギーなどの生命線も地域内で供給される場合が少なくない。

実際に、近代化以前の山村や島嶼では、基本物資や社会基盤が自給せざるをえない状況があり、地域自給が実践されていた。産業資本主義経済が高度化する以前に、農業人口が過半数を上回る社会では、ほとんどの農山村の地域社会は、そこに商品経済が部分的に進入しながらも、互酬と相互扶助による自給経済で成立していた。とりわけ山村は、これまでみたように、平地部から地理的・物理的に孤立化しているため、商品経済の浸透度が低く、換言すれば商品経済から自立できるので、地域自給度が高いとみなせる。こうして山村は、孤立化ゆえに周辺化して、集中・分配型の市場経済における基本物資供給や、中央統制的な社会基盤整備からも取り残されたため、基本物資供給や社会基盤整備を小規模・分散型で自立して運営せざるをえなかった。

典型的な山村であるzムラも、自律化したムラ社会として形成され、近代化以降においても、社会変動の状況に応じて、個人の生活や社会制度に自律化の特徴を数多く残している。とりわけzムラ自治会の活動は、1889（明治22）年の町村制の施行でz集落がv村に編入されて以来、基本的な組織形態は実質的にほとんど変更なく、今日まで運営されてきた。すなわち、その自治会活動における通常の議決は、各世帯のイエを基礎単位として、近隣のイエが十数世帯集まって「組」が形成され、組

を代表する「組長」が自治会の定例会議である「寄合」に出席してなされる。組長は、組内世帯において1年ごとの輪番である。また、住民個々人は、自治会の「委員会」や、併設された青年部、女性（旧婦人）部、消防団といった「部会」や「団」に所属して自治活動に参加した。すなわち、自治会では、zムラ成人住民の全体が自治活動に何かしら関与する形態が成立している。（zムラの自治組織とその活動については、その限界集落再生活動と合わせ、稿を改めて論述したい。）

また、zムラで伝統的に自給自足であった食・住・衣などの基本物資については、商品経済が大戦後にzムラに浸透して以来、zムラ住民はそれらの多くを商品として購入するようになったが、とくに食料については近代化以降もかなり自給で賄い、現在もその慣行はつづいている。zムラの食卓には、「自然の基盤化」で触れたように、山で採集される山菜などの食材、自家の収穫作物や他家との交換食物など、無農薬や減農薬の新鮮な農作物が豊富にならぶ。そうした有機、無添加、無農薬、減農薬などの食料は、1980年代後半から先進諸国の中心＝都市で自然・健康ブームを反映して、スローフードや地産地消などの社会運動とともに志向されているが、それらは市場で希少であるため高価である[19]。ところが、そのような高価な商品である無農薬・減農薬の新鮮な食料は、zムラのような山村では地産地消で日常的に食されている。

こうして、現在（2012年12月）、世帯数49世帯・人口83人（男40人・女43人）で構成される集落社会のzムラは、孤立化と周辺化のなかで、その小規模な集落社会の存続が住民全体の総意をできるだけ反映するように住民自治で運営される結果、都市部と比較して資本主義経済から相対的に自律化する状況にある。その自治組織の活動は、中世の自然村を濫觴とする自律化の伝統に繋がるようにみえる。ただし、zムラの自治組織は近代的行政機関にしばしば統制されて現在に至る[20]。実際、zムラの自治会は戦時中、軍事統制国家によって僻地山村の模範的な末端組織とみなさるよう努力した（Am(89)談）。しかし、伝統的に行政機関と対峙する自治組織があり、zムラと行政機関との関係に関する決定事項は、つねに――形式的な場合もあるにせよにせよ――地域内で合議された。すなわち、zムラでは自治組織の決定と実践がつねに機能してきたのである。

そして、現在zムラが1990年代以降に限界集落化した状況で、自治組織の活動にみられる主たる変化は、女性やIターン者の比較的年齢の若い（40歳代）住民さえも、自治組織の決定に影響力をもちはじめたことである。かつて、村落共同体の特徴として、集落社会内の合議があったとしても、最終的決定権と事実上の権力は、男性権力者や年長の男性集団の手にあった。ムラの最小単位であるイエにおいても、その代表者は家長の男性である。こうした状況はムラの様々な組織に形式的に残るが、実質的に女性や比較的若い住民が自治活動における発言権や、ときに主導権をも獲得している。そうした状況が生まれた契機は、1980年代末の地域再生活動にあった。それは、自治会女性部の有志が1970年代末に始めたムラの再生活動に由来する。その活動が成功し拡大してムラ全体を巻き込むようになると、以来、ムラの再生を協議する過程で女性や年少者の発言権や主導権が発揮されるようになった。（この状況についても、稿を改めて報告する。）

こうしてzムラの自律化は、典型的な山村で一般的にみられるように、ムラ社会を主に住民主体の自治活動で運営し、また基本物資のとくに食については自給を保っている（もとより、zムラは、歴史的に中央／地方の行政機能に組み込まれているので、行政の意向に追従せざるをえない場合があるが、その場合でさえも、相対的に自律してきた。zムラのような山村は、一般的に、孤立化と周辺化によって、高度近代化社会の中で貧しい未開発地域と評価されがちである。しかし、山村は、住民の自治活動によって自律する集落社会を形成し、商品経済に巻き込まれながらも、万が一商品経済が不測の事態に陥たとしても、そこから自立する可能性の高い集落社会とみなされる。

2-5　山村の力動性から構成されるムラの特性

以上でみたように、典型的な山村であるzムラの現実は、山村を構成する4つの力動性によって生みだされる。zムラは、山地という自然の中に「孤立化」するので、高度近代化から取り残されて「周辺化」したが、その「孤立化」と「周辺化」のゆえに、zムラ住民の生活とムラ社会は、「自然の基盤化」において成り立ち、住民が主体的にムラ社会を運営して、伝統的に「自律化」してきた。このようなzムラ社会は、高度近代化の尺度で評価すると、都市と比較して生活が不便で効率的ではない。しかも、若者が都市に流出して限界集落となったzムラでは、70歳代以上の高齢者住民が圧倒的に多く暮らし、年少者は皆無という、もはや「社会」の存続が危機的な状況に陥った。

しかし、それでも、zムラ社会における住民の生活満足度は全体的に高い。実際に、多くのzムラ住民が「ムラの生活に満足している」と口々に語る。そして、多くの住民が地域再生の活動に関与し、さらに「生活満足度」を向上させようとしている。このような山村の生活に惹かれてzムラに住み着こうとする若いIターン者も、少しずつだが現われ始めた。

こうしてzムラは「周辺化」のために限界集落化したが、zムラ住民は、「周辺化」に対抗するかのように、高度近代社会とは異なる次元で、「生活満足」を求めて主体的に生活空間の再生を企てる。このzムラの現実は、持続可能な生活空間を構築する手がかりとならないだろうか。ここで手がかりとして注目されそうなのは、zムラ住民が自らの生活満足を志向し、多く場合に自治体や国の援助を当てにもせず、自らのムラ社会を主体的に再生しようとする、山村ムラ社会の「自律化」という点にある。zムラの自律化が可能となる一要因として、その社会関係と自治組織が主たる役割を果たしていると考えられる。そこでつぎに、zムラの社会関係と自治組織に焦点をあて、それらの実態を明らかにしたい。

（以下、「後半」に続く。）

註

（1）本稿で用いる「ムラ」の概念とは、日本の中世期に形成された、社会科学において惣村や自然村（鈴木 1940: 56-59）として特徴づけられる社会形態を表わす理念型の抽象概念である。ムラは、イエ（有賀 1966: 32-33, 1969: 164-175）やイエ連合にもとづく社会的連帯（有賀 1969: 175-185; 福武 1949: 34-38）と、構成員の社会生活に不可分にかかわる自然・生態系との基盤のうえに成立する、小規模な社会的統一体として特徴づけられる。

（2）小規模な地域を綿密に調査研究する集中的調査の手法や視点については、今西（1952）、Dore（1978）、Embree（1939）、Redfield（1960）などの古典的調査に倣っている。

（3）『郷土誌 v』を作成した経緯について、発起人の 1 人である Am(89) は、次のように語る。

［z］ムラは戦前とものすごく変わりました。山なんか 90％不在地主のもので、……昭和 30 年頃までは 70％地元の人がもっていました。わずか 30 年くらいの間にほとんど余所の人のものになってしまった。これはえらいこっちゃな、ものの様子がだいぶ変わったで、こんなことを分からんで、若い者が歳とったらつまらんことになるなあと思って、そこで郷土史を書かなあかんなと思って、無我夢中で［v 地区連合自治会に] やるかって言ってやった。自治会長が皆賛成してくれて、いくらかかる、ということになった。カネ集めてできなかったら大変だから、カネが足りなくなったら集めよう、と。むちゃくちゃやりました。

最初は、誰も積極的にやりません。それで、皆の家を［郷土誌に] 載せる、と言ったんです。「お前さんの家が出るよ」と言ったら、態度がコロッと変わりましたな。それから、原稿、1 週間くらいでくれと言うと、3 日くらいで、すっと持ってくる。えらいもんやな、と思いました。

本屋が、ワープロでやったら安く上がると教えてくれて、ムラにはワープロできるもんがおらんで、余所から来た人がボランティアでやってくれた。原稿は地元の人が書いて、わしは原稿を集める当番、印刷屋に行ったり、a［市］の図書館に行ったりしただけです。1 冊、700 円余りでできました。［この郷土誌は] ないよりましですな。明治から大正を経て、こう変わったのはよく分かりました。

このように語る Am(89) は、z 町 q 垣内出身の元中学校長で、現在は a 市街地に居住するが、毎日 z ムラの住居に自ら自動車を運転して通い、晴耕雨読の生活をしている。『郷土誌』の作成当時には v 公民館館長であり、現在も v 地区住民の間でも信頼が厚く、z 町ではご意見番のような存在である。Am(89) が語るように、『郷土誌』の発刊は、v 地区の大きな変化を目の当たりにした住民が、地区の歴史を振り返りながら現状を記録しようと決心して始まった。そして、それは住民の手作りによる郷土誌である。

（4）ただし、主要な道の他に、山を突っ切って近道をする林道や生活道が戦前まで多くあり、往来も多かった。それらの道は、通学にも使われた。今は、それらの道は使われておらず、古道となった。v 地区の古道を発掘・記録して、実際に「歩く会」を実践する v 地区市民センターの a 市職員Γ m(46) は、いう、「名前だけで、僕が調べたのは、8 箇所くらい。でも、あとから出てくる、いっぱい。忘れられた峠が。小さいのも入れると、2 桁は超しますね。全部、生活道です。」

（5）現在、女性部の地域再生活動にかかわる女性住民 9 名中、6 名は z 町外部から嫁いできた。それらの人たちは、全員 70 歳代で、第二次大戦直後に z ムラの住民となった。

（6）z 住民にとって、近年の悩みのタネは、獣害である。獣害は 2010 年頃から頻発し始めた。Df(70) はいう、「畑もつくってますやに。けど先生いけませんわ、イノシシとシカとなあ、あとはお猿さんもたまに回って来ますし。ほんとにもう、畑つくんの好きやけど、つくれんようになってきましたわ。そんでもなあ、その合間に採れるものもありますんで、また採れるかもと……。ここまでイノシシがでるようになって、なんともしょうがないですわ。畑はみんな囲いをしてますんやわ。そやけどな、その囲いを破ってきますんや。なんとしても入りますんやわ」。

（7）農業の健康効果は、しばしば科学的に議論され、研究もなされている。例えば、(株) エヌ・ティ・ティ経営データ研究所（2013 年）『農林水産省委託調査　平成 24 年度 農作業と健康についてのエビデンス把握手法等調査』農林水産省をみられたい。

（8）もちろん、健康な高齢者だけが z ムラに残っている可能性はある。実際に、Ff(42) によれば、この 10 年間に、z ムラ出身で都会に暮らす別居子が、親の高齢化を心配して z ムラ居住の高齢者を都会に引き取った事例が 3 件あるという。しかし、それらの高齢者は z ムラを離れたくなかったようだ。その中のある高齢者は、都会で暮らして体調を崩したという。また、退職して、都会から U ターンで z ムラに暮らす住民が、確認できた範囲で 3 世帯ある。ちなみに、z 町の I ターン居住者は、合計 6 世帯 8 人であり、年齢別にみると、40 歳代が 3 世帯 4 人と、70 歳代が 2 世帯 3 人、80 歳代が 1 世帯 1 人である。

（9）新制中学校の通学には、男子は地下足袋、女子は草鞋を履いた。Hf(77) は回想する、「草履で通った。それも藁草履。ゴム草履ができて、これ便利でいいなあ、って言って」。女子の中には、男子の歩きやすい地下足袋をみて、それを履く子もいたという。

（10）z ムラの山中で採れる山菜は、z ムラへの I ターン居住者である Ff(42) と Km(49) から聞いたものを列挙すれば、春にはユキノシタ、フキノトウ、タラ、ワラビ、葉ワラビ、ゼンマイ、コゴミ、タケ、イタドリ（最近は、シカが食べてしまい、採れなくなった）、ウド、ツクシ、など、また秋には、スギタケ、ヒラタケ、クソ、アケビ、ムカゴなどである。多くの住民は、山菜採りの特定の場所を見つけ、そこを秘密の採集場所として、

慣例では子どもにさえ教えないらしい。

(11) z ムラの山の神の祠は、たいていかつての村の共有林付近にあり、現在は a 市が所有する山である。z ムラにおける山の神祭は、4 垣内毎（1980 年に 1 垣内が消滅）に、伝統的には正月 7 日に行なわれたが、第二次大戦後には 12 月 7 日に催されるようになった。現在では、z 町 3 垣内のうち、山の神祭を執行するのは q 垣内だけである。

山の神について、柳田（1989b [1909]: 541-42）は次のようにいう、「……全国を通じて最も単純でかつ最も由緒を知りにくいのは、荒神、サイノ神、山ノ神であります。仏教でも神道でも相応に理由を付けてわが領分へ引き入れようとしますが、いまだ十分なる根拠はありませぬ。それだけにまたこの神々の起源の新しくないことが想像せられます。山ノ神は今日でも猟夫が猟に入り木樵が伐木に入り石工が新たに山道を拓く際に必ず祭る神で、村によってはその持山内に数十の祠がある。思うにこれは山口の神であって、祖先の日本人が自分の占有する土地といまだ占有せぬ土地との境に立てて祀ったものでありましょう」。

また、「村に住む者が山神を祀り始めた動機」について、柳田（1989a [1917]: 246）によれば、「近世には鉱山の繁栄を願うもの、あるいはまた狩猟のためというのもありますが、大多数は採樵と開墾の障碍なきを禱るもので、すなわち山の神に木を乞う祭を行なうのが、これらの社の最初の目的でありました」。

(12) ただし、1990 年代後半以降には住民の減少と高齢化のために、多くの垣内や組で途絶えている。また、Rm(71) が発行する「v' 通信」（2005 年 12 月）は、山の神について、次のような住民の「声」を伝えている。「山の神が近づいてきたが、タダで参加できるところと、金のいるところがあるのはなぜなのか。金のいるところも額に違いがあるという。グループごとにやっているので仕方がないかもしれないが、同じ住民なのに腑に落ちない。バラつきはなくした方がいいのではないか。それとも、思い切ってやめるのも 1 つの方法だろう。高齢化が進んで参加しにくい人もいる」[匿名、男]。

(13) 中心－周辺論は、従属理論が提唱した資本主義世界経済の構造論である。従属理論は、1960 年代のほぼ同時期に何人かの経済学者が提唱した資本主義世界経済論の総称とみなされる。その代表的な経済学者の 1 人であるフランク（1969）は、低開発国内と開発国－低開発国とにおける収奪について、中枢－衛星という分極化構造を指摘した。それによれば、低開発国内部における都市・中枢が農村・衛星を収奪して剰余を獲得し、その収奪による剰余が開発国に移転することで、開発国・中枢－低開発国・衛星の分極化が永久に固定化される。この剰余の移転に関するメカニズムについて、エマニュエル（1971）やアミン（1973）による、不等価交換論が提唱され、開発国－低開発の構造は一般的に中心－周辺と呼ばれるようになった。不等価交換とは、中心の相対的な少量労

働時間の生産物と周辺の相対的な多量労働時間の生産物とが等価で交換され、中心は少量労働時間で多量労働時間の生産物をえるという、不均等な価値移転の結果を意味する。このように、従属理論は、中心－周辺の構造について、マルクス経済学が説く資本主義世界経済の不均等発展によって、開発国と低開発国（第三世界）が独立して存在しながら構造的に不可分となるメカニズムを説明した。

(14) 農林水産省によれば、「自給的農家」とは、「経営耕地面積が 30a 未満かつ農産物販売金額が 50 万円未満の農家」であり、農産物の商品生産を主目的とするよりも、その自給生産を主目的とする農家をいう。

(15) 『郷土誌』には養蚕が次のように記載されている。「養蚕収入が貧困にあえぐ当時の農家経済をどれほど潤したか、計り知れないものがあった。このため、養蚕農家では蚕のことを「おかいこうさん」と呼んで尊重していた。農家の中には例外として専用の蚕室を持つ家もあったが、たいていの家は蚕を居室で飼って人間は土間で寝た。蚕棚は高さ約 1.8㍍、幅約 80㌢の枠を約 20㌢の段に区切り、枠に竹を 2 本渡し、その上に竹製のせいろう［蒸籠］を差し込んで蚕を飼う。春蚕（4 月下旬）夏蚕（7 月中旬）晩秋蚕（9 月上旬）と年に 3 回掃き立て［種紙についた孵化したばかりの毛蚕を、羽箒で掃いて、蚕座に移す］、まゆの収穫は年に 3 回あった」（p. 115）。

(16) Nm(80) は、1949（昭和 24）年から隣接する c 市の 4H クラブ［20 世紀初めに米国で発祥し世界に普及した、農村の生活向上や農業技術の改良などを目的とする農村青年組織。4H は、Head、Heart、Hand、Health の頭文字］にオートバイで通って稲作を学び、3 年ほどで米づくりに成功した。米づくりに一生懸命だった Nm(80) は、自分がムラから「米キチ」と呼ばれていた、と当時を回顧して笑う。

(17) z 町を含め v 地区全体は、日本全国の山村と程度の差はあれ、同様に高度経済成長期（1960 年代）の過疎化に逢着した。それは、農村のとくに若年労働者が都会に仕事を求めて離村した、日本におけるルイスの転換点であり、農村人口の社会的減少であった。z ムラでも、この時期に若年層人口が村から都市に流出し、挙家離村も多くみられた。そして、z ムラに残った当時の壮年住民も、バブル景気期（1980 年代後半）に高齢化し、若年層の流入もなく、z ムラは人口の自然的減少により限界集落化して今日に至る。

同時期には、山村振興関連の法律や助成施策が整備され、一般的に、山村のダム建設、道路工事、拡大造林事業などの公共事業も施行された。そうした山村振興政策は、一時的に山村の景気を浮揚させるかにみえたが、根本的な山村振興になりえない。この時期に日本の山村の過疎化は急速に拡大し、その集落社会は荒廃していった。z ムラも例外ではない。同時期に暴風雨災害に毎年悩まされてきた z ムラ各垣内に、砂防堰堤などが次々に整備されたが、その過疎化は止まらなかった。

(18) ここでEm(74)が説明する「合理化されたとき」とは、日本電信電話公社が一般家庭にレンタルしたパルスダイヤル式電話機が普及したときを指す。

(19) 近代社会の農産物は、資本主義経済において大量生産・大量消費が追求される「商品」となり、大規模農業化、すなわち「農業の工業化」によって、低価格化・規格化・標準化で提供される「商品」となった。その弊害によって、農作物に多くの深刻な諸問題が発生してきた。そこで、農産物に資本主義経済の希少商品として、安全性、鮮度や味覚などの品質性が一部の消費者から求められ、それに対応する高価な農作物が有機、無添加、無農薬などの農法で提供されるようになった。

(20) 国家の政策的な近代農山村「自治」の史的展開については、村落社会研究会編1979において特集されている。

文献

アミン, S. 1973『不等価交換と価値法則』(1979花崎皋平訳) 亜紀書房.

有賀喜左衛門1966『日本小作制度と家族制度　有賀喜左衛門著作集Ⅰ』來来社.

———1969『民俗学・社会学方法論　有賀喜左衛門著作集Ⅷ』來来社.

今西錦司1952『村と人間』新評論社.

エマニュエル, A. , C. ベトレーム, S. アミン, C. パロウ 1971『新国際価値論争　不等価交換論と周辺』(1981原田金一郎) 拓殖書房.

河合雅雄1990『子どもと自然』岩波新書.

鈴木榮太郎1940 [1968]『日本農村社会学 (上)　鈴木榮太郎著作集Ⅰ』來来社.

村落社会研究会編 1979『村落社会研究 第15集 (共通課題=農村自治)』御茶の水書房.

鳥越皓之編著2007『むらの社会を研究する　フィールドからの発想』農山漁村文化協会.

福武直1949『日本農村の社会的性格』東京大学出版会.

フランク, A. G. 1969『世界資本主義と低開発　収奪の《中枢－衛星》構造』(1976大崎正治・前田幸一・中尾久訳) 柘植書房.

ブローデル, F. 1966『地中海①』(1999浜名優美訳) 藤原書店.

宮口侗迪1988「山村生活の価値と発展の可能性について」『地理科学』43(3): 159-63.

安村克己2009「「生活空間再生論」構想の見取図　玉野井芳郎「地域主義」を手がかりとして」『地域創造学研究』Ⅲ (奈良県立大学) .

———2012「「山村」再生の実践に関する生活空間再生論の新たな視座」『地域創造学研究』XVII (奈良県立大学) .

柳田国男1931『日本農民史』刀江書院.

———1989a [1917]「山人考」『柳田國男全集４』ちくま文庫.

———1989b [1909]「山民の生活」『柳田國男全集５』ちくま文庫.

Dore, R 1978 *Shinohata: A Portrait of a Japanese Village*, Allen Lane.

Embree, J. F. 1939 [1995] *Suye Mura: A Japanese Village*, the University of Michigan.

Pratt, M. L. 1992 *Imerial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge.

Redfield, R. 1960 *The Little Community and Peasant Society and Culture*, The University of Chicago.

付記

本研究は、科学研究費（研究課題番号：23614016）の助成を受けた調査研究における成果の一部である。

2016年1月5日受理